日本の展望委員会　理学・工学作業分科会（第１回）議事要旨

１．　日　時：平成 20 年 9 月 17 日（水）17：00－19：00
２．　場　所：日本学術会議　６－Ｃ（１）会議室
３．　出席者：海部宣男（委員長）、大垣眞一郎（副委員長）、河野長（幹事）、岡本和夫、
　　平朝彦、坂内正夫、矢川元基、柘植綾夫、井筒雅之、馬越佑吉
　欠席者：小林敏雄、今中忠行、三田一郎、岩澤康裕、濱田政則
　事務局：渡辺参事官、戸田補佐 他
４．　議　題：
　　１）委員長、副委員長及び幹事の選出
　　２）検討事項について
　　３）今後の進め方について
　　４）その他
５．　資　料：
　　資料１　「日本の展望―学術からの提言（仮題）」についての考え方
　　資料２　日本の展望委員会テーマ別検討分科会で取り上げるテーマの説明
　　資料３　日本の展望委員会　今後の進め方等について（案）
　　資料４　「日本の展望」に関する各分野別委員会の取り組みについて（第三部）
　　資料５　委員名簿

　　参考１　日本の展望委員会運営要綱
　　参考２　日本の展望委員会委員名簿

６．　議事概要

（１）委員長、副委員長及び監事の選出

　委員の互選により、海部委員を委員長に選出した。その後、委員長が大垣委員を副委員長に、河野委員を幹事に指名し、委員会の同意を得た。

（２）検討事項について

　海部委員長から、資料１，２，３によって「日本の展望」の作成についての全体的な考え方、テーマ別検討分科会の概要、全体的なスケジュール、作成すべき報告書の大体のイメージ等について詳しい説明があった。

（３）今後の進め方について

　海部委員長から、各分野別委員会がどのように「日本の展望」に取り組もうとしているかについて、資料４にまとめられていることが指摘された。これらも踏まえた上で今後この作業委員会がどのような問題を取り上げるか、またそれらをどのように取りまとめていくか、などについて意見交換を行った。この議論では、以下のような意見が出された。

・各分野から問題点を出してもらって、それから理工系全体にわたるものを抽出するのがよい。
・各分野から出たものを単にまとめるのではない。理工系から社会へ出すべきメッセージは何かを各分野に問いかけ、その回答をもとに作業委員会で議論をする。
・本分科会には各分野から代表が出ているので、分野の意見をよく反映するようにしたい。その中から共通な問題を引き出す。
・学問の各分野に日本学術会議がどうかかわっていくのかの全体像と問題点を指摘する。
・学問を進めてどういう展望があるか、また社会の側にどういう需要があるかという視点、たとえば「環境」という切り口でも個々の分野でなく全体での見通しを示したい。
・スーパーコンピュータが作られても、その次のグランドデザインができていなければ国際的に立ち遅れる。
・資料３をみると第一部では共通課題を各分野におろしている。作業委員会で一方的に議論を進めるべきではない。まず各分野に共通的課題や履行分野として提言すべき重要テーマを問い合わせるのが良い。
・夏期部会の段階で各分野の意見を集めてあるので、ある程度分野の意見は見えるのではないか。それからキーワードを５つぐらい選びだしたらどうか。
・分野に依頼して理工学全体も視野に置いた重要テーマを考えてもらうことは、各分野にとっても「展望」の作業を進める刺激になる。
・「展望」全体では「社会的に重要なもの」と「学術において重要なもの」の二本立てになっている。社会的な問題についてはテーマ別の委員会がたてられており、部の作業委員会は学術のほうに絞ってよいのではないか。
・例えば、学術研究の役割を定義しなおすという考えは「基礎科学」のテーマ別委員会でも出ている。おそらく第三部での検討と重なるだろう。しばらくはある程度重複を許容して学術を発展させる方策も考えたい。
・ここ十年ぐらいの各分野での方向性、それを実現するために考慮すべき課題や問題点、の２点に絞って各分野に聞いたらどうか。
・賛成である。
・日本は二流国家だといわれるようになったが、一流にするためにはどうすればよいかという視点が重要ではないか。
・主旨はわかるが、一流の国でなければいうのは必ずしもコンセンサスではないので、言葉を考えたい。
・理工学あるいは科学技術の重要性を社会に説得できる論理が組み立てられればそれのみでもよい。
・自然を理解することが重要だから理工学は大事、それがまた、若い人に夢を与える。こうした点で分野から具体的なものをあげることでなるほど大事だと社会に納得させる。
・結局重要なのは国力だと思う。
・国家ありきが先にあっては学問の国際性と矛盾する。グローバルな中で大きな寄与ができれば国家としても存在感が増す。
・税金から支出される資金で科学技術は支えられているのだから、税金を払っている国民を

納得させられる理由づけは必要。

・食料などは危機的状況にある。食料自給率を上げる方策はどうか。

・我々の考え方は日本の経済がよかった時のものがベースになっている。なんでも日米欧が３極を作らなければならないわけでもなかろう。

以上の議論をふまえ、以下のように進めることに決定した。

- 各分野から理工学分野として主張すべき特に重要なポイントを聞き、回答を求める文を作成する（担当：平、河野)。
- 問い合わせる内容は、理工学各分野の学術の展望、その分野からの社会的貢献、およびそれらを実現するための課題といった内容とし、それらを踏まえて、各分野での検討と平行しかつ連携しながら、理工学分野全体として提言すべき事項の検討を進める。
- 依頼文の原稿を各委員に送り、必要なら改定をする。
- 遅くとも９月２９日までに、依頼状を当委員会メンバーと分野別委員会役員へ発送し、１０月３日の分野別委員会で検討を始めてもらう。
- 回答の期限は 10 月 17 日。

（４）その他

次回開催日時は 10 月 27 日（月）16：30－19：00 を第一候補とするが、前後の可能性も委員に問い合わせる。

（以上）